

# 月報

<437号>

ケルン・ボン日本語  
キリスト教会

二〇一七年八月二七日発行

## 信仰の春夏秋冬

佐々木 良子

すっかりと季節が移り変わり、燦燦と降り注ぐ太陽や白夜が懐かしく思うこの頃です。私たちの人生にも春夏秋冬があつて、いつも春や夏のように生き生きと輝いている時ばかりではないことを、様々な経験を通して知っています。暗く凍てつくような寒さの中で、何の手立てもなく行き先が見えない暗い日を迎えるような状況に追いやられる時がしばしばあります。

「洪水は四十日間地上を襲った。水は次第に増して箱舟を押し上げ、箱舟は大地を離れて浮かんだ。水は勢力を増し、地の上に大いにみなぎり、箱舟は水の面を漂った。……地の面にいた生き物はすべて、人をはじめ、家畜、這うもの、空の鳥に至るまでぬぐい去られた。彼らは大地からぬぐい去られ、ノアと、彼と共に箱舟にいたものだけが残った。水は百五十日の間、地上で勢いを失わなかった。」

(創世記七章一七〜二四節)

ノアは神のご命令に従い、雨が降りそうにもない時に、大雨に備えて箱舟を造りました。やがて洪水が地上に起こり、ノアたちを乗せた箱舟は洪水の中これから先どこに向かうのか誰も行き先が見えませんが、舟から出たら荒波に呑まれるのみです。神に従ったものの為す術もなく、唯、そこに留まってい

るしかありませんでした。ギブアップ状態です。しかし、神の憐みの時が来て水は地上から引いたと聖書に記されています。

「神は、ノアと彼と共に箱舟にいたすべての獣とすべての家畜を御心に留め、地の上に風を吹かせられたので、水が減り始めた。また、深淵の源と天の窓が閉じられたので、天からの雨は降りやみ、水は地上からひいて行った。……箱舟はアララト山の上に止まった。」

(創世記八章一〜四節)

嵐の中で彼らは何か特別なことをしたわけではなく、唯、神を信じた中に留まり続け、気づいたアララト山の頂上に着いていたのです。神は苦難の中にある彼らを御心に留められ、彼らの知らないところで一つ一つ御業を進められていました。試練の波は希望を呑みこんでしまうように思いますが、そのような状況でこそ神が働いておられることを経験させて頂き、信仰が養われていくものです。

とはいうものの、信仰生活は目に見えないものから、ただ信じ続けることの難しさを覚えます。苦しみが大きければ大きいほど、神の恵みの約束を忘れてしまい、自分で何とかしなくてはと、気持ちが逸るばかりです。

「お前たちは立ち返って 静かにしているならば 救われる。安らかに信頼していることにこそ力があ

る。」

(イザヤ書三〇章一五節)

私たちが閉ざされたと思ったところに、神が道を開いてくださったことを知らなくてはなりません。そこにこそ救いがあるのです。神を信じるという事は特別の能力や知識があるわけではなく、唯、自分を見守っていてくださる方を静かに信じるだけです。

私事で恐縮ですが、前回の月報の編集後記に少し書かせて頂きましたが、キルン・ボンに参加中、ケルン・ボンに戻ってからの一ヶ月間は、簡易ギブスで足を固定せざるを得ない状況となりました。教会に行く以外に家の中に閉じ籠るという生活でしかないと感じていても、悶々と過ごした時もありました。しかし、情けない私を見守っていてくださる神がおられることに励まされたものです。

人はこの世で春夏秋冬、それぞれの季節を歩ませて頂いています。春にしか経験できないこと、冬だからこそ味わえることもあります。厳しい寒さと暗闇の中を知っているからこそ、夏がどんなに素晴らしいかを知ることができます。春がどんなに素晴らしいか、それが全てだとは思っていません。明るい春も凍てつく冬も生き抜いて、初めてより深い人生の神の真実を知ることに至ります。これが信仰の醍醐味と言えるのではないのでしょうか。

長い人生の中でノアの如く、自分の経験や知識ではどうにもできない状況の中で、ただひたすら神の時を静かに待つしかない状況に追いやられる時があります。そうした時、ともすると私の人生は何か訳の分からないものに翻弄されている、と思ってしまうのですが、そこではありません。神が私をそこに導き運んでくださり、そこにはもっと大きな神の導きが存在して、既に道が開かれています。その一事に気づかせてくれるのが信仰ではないでしょうか。これからも見えない神の業が私たちにどのように顕されていくのか、信仰の春夏秋冬を楽しみながら味わいつつ歩いていけたら幸いです。

ゲーテの「憩いの詩」

小塩 節

マルティーン・ルターの「第一の弟子」だと自負していた詩人ゲーテ(一七四九—一八三二)は、たいへん自由な詩作を生涯にわたって続け、ときには異教的ですらあるほどの人でしたが、ルターへの敬意と感謝を一生忘れませんでした。思想と言語表現の自由を与えてくれ、心に愛を与えてくれた、とくり返し語り、記しています。そのゲーテは、疑いもなくドイツでは「第一」の詩人でした。

彼は二十六歳の若さでワイマル公国に客人として招かれ、たちまち内閣の一員となり、税制改革、農業・道路・教育・鉱業を改善し、軍事を半減するといったいへんな改革をなしていきます。八月二十八日が彼の誕生日ですので、この月報では異例のことでしょうが、若い詩人・大臣であったゲーテの小さな詩を一篇ご紹介いたします。

旅人の夜の歌

峯々に  
憩いあり  
梢を渡る  
そよ風の  
跡もなく  
小鳥は森に静もりぬ  
待て しばし  
汝(なれ)もまた 憩わん

ワイマルのかなり南のキツケルハーンという山に登り、狩人小屋に一泊。山々を見渡す夕べの壮大な眺めを、即興の八行詩にして小屋の板壁に鉛筆で書きとめました。終わりの二行に目をお留め下さい。山頂から若さにまかせて遙かな山麓へ駆けおりたい、そんな激情と若さを自らおさえて、「待て」と抑制し、この大いなる夕べの安らぎと同じような憩いをお前(つまり自分)も得るのだと、自然と人間の大きな宇宙世界の、永遠者による安らぎを詠っています。Wanders Nachtied という題のこの詩は、今までに何と一五〇曲以上も作曲されており、なかでも静かで実に心安らぐ曲は、フアンツ・シューベルトの作品です。

ウィーンのシューベルトはゲーテの詩「野ばら」や「魔王」など四〇編も作曲、はるかワイマルの詩人宛てに手書きの楽譜を送っていたのに、音楽家の友人たちのすすめでなんとゲーテはシューベルトを無視して、贈られた楽譜を見もしませんでした。ところが、八〇歳になったとき、若いソプラノ歌手がワイマルの彼の家で「魔王」その他を歌うのを初めて聴いて感動します。そのウィーンの作曲家は二年前に若くして亡くなっていると聞いて、「遅かった」とくくやみました。

でも、当時としてはたいへんな高齢であったのに、自分の耳で聴いて感動できたというのは芸術的感性のあかしでもあります。

さて、それから二年後、ゲーテは八十二歳の誕生日を、幼い二人の孫たちとともにあのハブメートルの山に登って自ら祝うことにしました。当時としてはたいへん元気なおじいさんです。そして実際に

山小屋に着いて、自分の手で書いた詩を改めて読みます。しばらくじっと鉛筆書きの自分の詩を読み、窓越しにドイツトウヒとナナカマドの森を眺めてましたが、ふっと、「ほんとうにそうだ。待てしばし。汝もまた 憩わん」と終わりの二行を読みあげます。V.P.Pのゲーテが山に登るといって、森林管理官がそっと付き添っておりまして、横から見ると、老詩人は真っ白なハンカチを取り出して目をおさえました。彼の妻も、ひとり息子も、仲の良かった君公も友人シラーも世を去っています。「やがて お前も永遠の憩いにつくのだ」、そうなのだ、声にしたのです。

若かりし日には思いもよらなかった永遠憩いが、実はこの小さな詩にすでに詠みこまれていたとは、詩人自身も感動したのでした。詩というものには、そういうことがあるのですね。——明るいうちに山をおりたゲーテは、ふつつの老人なら横になって休むところのように、それから夕方までに宿で二冊も哲学の本を読みあげ、夕食にはかわいしい孫たちと誕生日祝いの音楽を聴き、心からたのしみます。でもその半年のあと、彼は永遠の憩いに就いたのでした。(おしお たかし)



7月2日 大人と子どもの合同礼拝後、愛餐会にて



宗教改革五〇〇周年の年の  
ヨーロッパキリスト者の集い

安藤 廣之

「宗教改革より丁度五〇〇年の年、二〇一七年にヨーロッパキリスト者の集いの主催が出来ないだろうか……。」ミュンヘンに来た二〇一〇年頃から、私は何かに取り付かれた様に考えていました。しかし当時は教会と言っても開拓であって私達家族十人と言った人数、当初は妻にも相手にして貰えないと言った有様。少なくてミュンヘン教会単独での集いの開催は無理と思ひ、他のドイツの日本語教会へ「二〇一七年の集いを共催しませんか」と呼び掛けたりもしました。しかし共催と言っている方にも賛同が得られず、その話は諦めなくてはなりませんでした。しかし不思議な事に当初は余り関心を示さなかった妻が前向きに考えてくれるようになり、ホテルを捜したりと言った事も自分からするようになりました。その様にして結局は二〇一四年の集いの代表者会でミュンヘン教会単独の主催を立候補しました。今思うとかなり無謀な立候補でしたが、満場一致で承認して頂きました。

その後、神様はミュンヘン日本語教会にある程度の人数と様々な賜物を持った兄弟姉妹を加えて下さいました。とりわけ実行委員長として高木真由美姉が立って下さった事と、姉の忠実な御奉仕(本場に沢山の連絡や交渉をして下さった事)に心から感謝しています。集いは信徒大会という原則もあり、信徒の中から実行委員長を出す必要があるからです。

初めは定員(当初は二五〇名)まで人数が集まるだろうか心配しましたが、申込期間の終わり頃には三〇〇を超える申し込みがあり、この全員を受け入れるにはどうしたらよいかとの心配へと変わりました。

ました。それによってホテルにお願いし部屋を増やして頂いたり、シングルの方にツインに代わって頂けるようにお願いしたり、一度に全員では食事が採れない問題等も出てきました。

更に苦労したのは、申込期間が過ぎてからも入りたいと言つた人の受け入れを巡って、或いは直前に成って事情が出来たのでキャンセルしたいと言つた数名の方々への対応(お金の清算)などです。その都度議論を重ね、実行委員が共通の認識に至るまでにもある程度の時間を要しました。ただしその様な所謂例外者への対応によってかなりのエネルギーを使わなくてはならない事を経験したことで、私達はイエス・キリストによって例外的に救って頂いたことを覚えて感謝しました。

今回は主催側の人数が少なく、参加者が多かった為にも、細かい所まで手が回らなかったことは確かです。代表者会でも幾つかのご指摘を頂きましたが、全体を通しては足りない所も多分にありました。けれど今の私達の教会としては精一杯のご奉仕、最善を捧げる事ができたと思っています。いずれにしても私達だけではとても出来なかつた多くの御奉仕を多くの欧州の先生方や兄弟姉妹に担って頂いた故にもこの集いが開催できました。この場を借りて心から感謝いたします。

(尚私は一九九九年秋から二〇〇九年夏までデュッセルドルフ日本語キリスト教会の牧師をしていました。その間、何度かケルン・ボン日本語キリスト教会にも行かせて頂きました。牧師先生方とも親しくして頂きました。当時ケルン・ボン教会おられた方々にもこの場を借りてご挨拶申し上げます。)

(ミュンヘン日本語キリスト教会牧師)

## ◇ 報 告 ◇

七月二日の礼拝は初めての試みとして大人と子どもの合同礼拝をお捧げすることができました。当日は久しぶりに日本より小塩節先生、トシ子姉がおいでくださり、尾畑真知子姉の素晴らしい特別賛美、そして野外礼拝においでくださった若いファミリーの参加があり、沢山の恵みに満たされた礼拝となりました。感謝いたします。このようなファミリーがこれからも教会に繋がっていくことができますように祈りお願いいたします。又、七月一六日の礼拝には、「佐々木良子宣教師を支える会」の日本基督教団・小松川教会の方々が三名おいでくださり励まされました。



七月九日(日)はボンハッフアー教会前の通りのバザール(Strassenfest)があり、ボンハッフアー教会との合同礼拝後、ケルン・ボン教会も海苔巻き、焼きそば、押し寿司など販売して協力しました。

七月二〇日に、ボンハッフアー教会牧師の前任者であられた Eneke 牧師の葬儀が行われ、佐々木牧師初め役員、教会員が出席いたしました。

前掲の安藤先生の寄稿にもありますように、二〇一七年の欧州キリスト者の集いはライプツィヒにおいて、八月三〜六日まで開催され、三百名を超える参加者が与えられました。宗教改革五〇〇周年記念として「キリストが内に生きる(ガラテア一:一二〇)」をテーマに、一〇回のメッセージ(講演)と一五の分科会、CSのプログラムが行われ、トーマス教会での賛美礼拝もありました。集いの様子は欧州キリスト者の集いのHP (<https://www.europesudoi.net>)で見ることが出来ます。当教会からは牧師と役員が参加いたしました。来年はイギリス・エディンバラで開催されます。

「信徒の友」八月号に、シユミット亜弥子姉が執筆された「ケルン集会の恵み」が紹介されました。私たちの教会を多くの方に知って頂き感謝です。どうぞホームページをご覧ください。

子育ての学び会を今年の二月から、月一回、牧師宅で始めましたが、この集いが定着していることは嬉しいことです。聖書を元にしたテキストを用いながら、和気藹々とそれぞれの思いを語り合い、色々な気づきを与えられて、よい時を過ごしています。集っておられるママたちが、お友達に声をかけてくださり、輪が広が

っています。更に子どもの礼拝へと展開していることは大きな喜びです。細々とスタートした教会学校は今さっています。いずれの日か、イエスさまを信じて教会のメンバーとなっていくことが目標です。

◆ 予 告 ◆

バザーのお知らせ  
11月1日(水・祝日) 13時~16時  
場所: ボンハッフアー教会

日本食と喫茶、蚤の市が皆さんのご来場をお待ちしています!  
収益は、ディアコニー「世界にパンを」へ献金いたします。

ボランティアを募集!

①商品の値付け、②会場の設営や撤収、③日本食、ケーキなどの提供(材料費は当方で負担します)、④当日の販売補助、⑤その他  
詳しくは牧師まで

【九月の主な礼拝・集会の予定】

九月三日(日) 礼拝(聖餐式)

一四時

四日(月) 外国語協議会

一八時

五日(火) 聖書を学ぶ会

一〇時(牧師宅)

七日(木) ケルン家庭集会

一時(シユミット姉宅)

七日(木) リンデンタール役員会

一九時三〇分

八日(金) 聖書を学ぶ会・入門編

一四時(牧師宅)

一〇日(日) こどもの礼拝

一二時三〇分~一三時三〇分  
(原則毎月第二日曜日)

主日礼拝

一四時

一日(月) ママの子育ての学び会

一三時(牧師宅)

四日(木) Strassenfest 懇親会

一九時

七日(日) 礼拝・役員会

九日(火) 聖書を学ぶ会

一〇時(牧師宅)

一二日(木) 聖書を学ぶ会・入門編

一四時(牧師宅)

二四日(日) 大人と子どもの合同賛美礼拝

一四時~一五時 礼拝後、愛餐会  
(原則毎月第四日曜日)

三〇日(土) 夕礼拝

一八時(アントニー夕教会)

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会  
Japanische Evangelische Gemeinde  
Köln-Bonn e.V.

〈主日共同礼拝〉

会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche  
住所: An der Decksteiner Mühle 1  
50935 Köln (Lindenthal), Germany  
電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)  
時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

〈牧師〉 佐々木良子 (Pfr' Ryoko SASAKI)

牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln  
固定電話: 02234-9298792  
携帯電話: 0151-2910 6278  
Email: r310130s@yahoo.co.jp

〈ホームページ〉

<http://koelnbonn.jp>

〈振込口座〉

IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38  
BIC: PBNKDEFF